



あのマチ・地域おこし活躍中  
このムラ

深川市の事例

No61

「ライスランドふかがわ」による地域振興

深川市の沿革について

深川市は北海道の中央よりやや西に寄った石狩平野の最北部に位置し、東西の幅が約二二km、南北の幅が約四七kmと南北に細長く面積は五二九・三二三km<sup>2</sup>、人口は約二万四千人を有している。地目の内、約二二五を田畑が占めており米作りのさかんな街として知られている。深川市

は空知北部の交通の要衝の地でもあり、札幌と旭川を結ぶJR函館本線、深川と留萌との間を結ぶJR留萌本線、同様の都市へと向かう国道一二号・国道二二三号や高速道路道道央自動車道・深川留萌自動車道が通っている。

地名の由来については、域内を流れる大鳳川おおほうはアイヌ語の「オオホ・ナイ」から転じたとされており、オオホ・ナイのア

イヌ語の意味である「深い・川」が和訳で深川になったとする説が有力とされる。市の北・東・南の三方は山に囲まれており、南部には神居古潭の峡谷から急流で下ってきた石狩川が流速を緩めながら市内を東から西に貫流し、北部にはなだらかな多度志丘陵たどしの北側に沿って雨竜川が南西に向かって流れている。平坦地は石狩川と雨竜川やその支流に沿った流域に広がってお

り、市の中央部の平坦地は石狩川が神居古潭の峡谷を流れ出ると同時に形成された氾濫原である。市内の地名にはアイヌ語由来するものが多いが、一巳イチヤンの名前の由来はアイヌ語で「鮭の産卵場」を意味するものとされる。

開拓の歴史をひも解くと明治二五年に北海道庁令により雨竜郡深川村が設置され、三条公爵、蜂須賀侯爵、菊亭侯爵の華族に



深川市のカントリーサイン  
(道の駅 ライスランド ふかがわ)  
でマグネットで売られている。

よる農場開拓と屯田兵入植により開拓が行われ市街地形成も徐々に進んだ。昭和三八年に当時の深川町と一巳村・納内村・音江村が合併して深川市となり、昭和四五年には多度志町を編入して現在の深川市になっている。市の産業の中心は農業であり、中でも稲作は北海道の主産地を成しているが、そば栽培や各種の野菜や花卉、さくらんぼ・りんごの果樹栽培も行われている。

深川市のカントリーサイン(市町村の境界域の道路に立てられている市町村を案内する標識)はご存じの方も多いかと思うが、稲穂と赤いりんご(高速道路のカントリーサインは屯田兵のデザインも加わる)が描かれたデザインであり、このことから深川市の歴史や稲作への思いを知ることができる。

### 深川市の稲作のはじまりと農業生産について

市内を東西に流れる石狩川と市の北部を北から南西へと流れる雨竜川、この二河川の両翼のなだらかな平坦地に水田を主体に農地が拓けており、肥沃な土壌が多く夏期は高温になることから農業には恵まれた環境にある。

稲作への取り組みについては、市内の音江地区に入植した高橋惣吉が明治二五年に試作栽培したことに始まる。当時の北海道開拓使は北海道の気候風土から稲作を奨励しない方針を打ち出していたが、当地の高橋惣吉が始めた稲作の波紋は明治二九年以降には屯田兵たちに伝わり、成功した事実稲作の禁令を解除させることにつ

ながつたとされる。しかしながら、稲作の栽培を黙認していた当時の一巳屯田の中隊長は二〇日間の謹慎処分を受けたと深川市史には記されている。

稲作の試みについては、寒冷的な北海道においても自分で作った米を食べたいという願いが強かつたからにはかならないが、開墾地の多くが低湿地で畑作に向きであつたこと、資力に乏しく交通の便が悪く簡単には米を手でできなかったこと、稲作の経験をもつ人が存在したこと、米を作ることによつて自家用酒造りが可能となり酒で寒さをしのぐことができること、稲わらで縄や筵を作ることができるといったさまざまな要素があつたことが市史には記されている。これらのことが、稲作の禁令を犯し、かつ生産が極めて不安定であるというリスクをかかえて

までも稲作へと向かわせたものと考えられる。

現在、深川市の耕地は実作付面積九、九〇八haあるが、この内、水稻の実作付けは六、一四〇ha（生産調整は二五％）である。稲作耕作者は六二〇戸であり一戸当たりの稲作耕作面積は約一〇haと大規模な稲作経営によつて産地形成が進められており、道内はもとより全国でも稲作に特化した地域である。

品種別の作付けは「ななつぼし」「きんぎょ」「ふつくりんこ」の主力品種に加えて、期待の良食味品種の「ゆめぴりか」や、酒造好適米「吟風」「彗星」の作付けもあり多彩である。

畑作物では、そば・小麦・大豆・小豆・馬鈴薯などの作付けが平成二二年では二、七四八haある。野菜では胡瓜が道内有数

の主産地としてのブランド力を有しているのははじめ、アスパラガス・メロン・かぼちゃ・長ねぎなどで六八haの栽培となっている。花卉はスターチス・よしの鈴バラをはじめとして各種の花の栽培が三六haである（数値はいずれも深川市資料の平成二二年産見込みのものを使用）。果樹では、さくらんぼ・りんご・醸造用ぶどうなどの栽培が行われている。さくらんぼ・りんごなどの観光農園は道央自動車道沿いの地区に集中しており、フルーツ狩りもさかんである。

### 深川市の稲作による産地形成について

深川市の稲作の産地形成の取り組みについては、米政策の大転換になつた昭和四四年から始

まつた生産調整対策への対応から窺い知ることができる。この当時の様子を深川市農協五〇年誌から紹介すれば、米の主産地としての存続を農協などを含めて構成する「深川市農業対策協議会」での確認のもとに取り組んだとされており、この米主産地としての存続と良質米生産の取り組み精神は今日にまで至っている。

国は食糧管理法制度の下で財政負担軽減を図るために昭和四四年から民間で流通させる自主流通米制度を発足させたが、当時の北海道の米穀は全量を国の買い入れに頼っていた。深川市は市内の農協やホクレンとともに昭和四七年から「ユーカー」の流通を開始し、昭和五四年に国の類別の買入れが導入された際にはユーカーは三類（北海道のほとんどの米穀は一番下位の

五類に格付けされた）に評価格付けされたのである。

その後、北海道全体としては昭和五年から五類の米を民間流通させる特別自主流通米の制度に取り組むことになるが、当時の代表的な銘柄である「キタヒカリ」から始まり、今日の「ゆめぴりか」に至るまでの間にわたり、深川は北海道の良質米生産の先駆となり、全道の牽引の役割を務めてきた。

### 「ライスランドふかがわ」の推進について

現在、深川市では稲作が主体であることから、米をテーマとしたまちづくり「ライスランドふかがわ」を推進していて、農業・米づくりの技術の向上や田園空間の維持、地域内外との交

流、地域・農業情報の発信などに  
取り組んでいる。

まず、平成九年に大型米穀調  
製施設「北育ち元気村ライス  
ターミナル」が竣工した。平成  
一九年には地元の「J Aきたそ  
らち」は国や市の支援を受けて、  
このライスターミナルに隣接し  
て新たにカントリーエレベーター



深川マイナリーの全貌



道の駅「ライスランド ふかがわ」の全貌



「ライスランド ふかがわ」の店内

ター「深川マイナリー」を竣工  
している。この新施設は深川産  
の米を粳で集荷し高品質な状態  
で貯蔵する機能を有しており、  
粗玄米換算で九、九〇〇トン処  
理することができる大型の米穀  
乾燥調製貯蔵施設である。施設  
の名称は市民からの公募によつ  
たが、ワインの醸造所の「ワイ

ナリー」と米の「マイ」をかけ  
て名付けられていて、施設運営  
の効率化と省エネ化（遠赤外線  
乾燥機の導入や原料受け入れの  
バーコード化）や自然環境を意  
識した貯蔵保管（冬期間の外の  
冷気を利用した靱低温保管）や  
トレーサビリティシステムなど  
の機能を有する新鋭の施設であ

り、深川市稲作の中心施設に  
なっている。

次に、道の駅「ライスランド  
ふかがわ」を紹介したい。この  
施設は平成一五年に開設された  
ものであるが、この施設は国道  
一二号と国道二三三号の交差点  
にあり、館内では地元深川の米  
や酒・チップス・プリン・油・



道の駅「ライスランド ふかがわ」の内部に設置されている「精米体験コーナー」

石鹼などの米を使つたさまざまな商品や、ふかがわワイン・りんごジュース・ウロコダンゴなどの深川の特産品、さらには北空知の特産品も販売がされている。

「精米体験コーナー」では二〇〇円を支払って粳から精米に

なるまでの行程を目で見て二・四合の精米を持ち帰ることが体験できることや、深川市の米の歴史についてのビデオが設置されていて、全館が「お米」がテーマになっている。先述の深川市のカントリーサインのマグネットもこの道の駅で購入する



「こめっち」がついた携帯電話用ストラップなどのイベント・PR用グッズ

ことができる。

二階には地元深川の米を使った釜飯が人気のレストラン「味しるべ駅通」があるが、ここでは新ご当地グルメの「深川そばめし」も食えることができる。

深川はそばの生産量が隣町の幌加内町に次いで全国第二位である。米とそばが一大産地であることから、深川産の地元の米とそばを使うのは当然ながら、米のオニギリには揚げたソバの実が入ることと、オニギリの味付けにはそばつゆを使うことが深

川そばめしの基本になっている。この道の駅では、市内の他の食堂で「深川そばめし」を扱っている店などさまざまな情報を仕入れるのにも便利である。

このほかには、市内に直売や食材の提供や農業情報の発信を行っている「ほつと館・ふあーむ（平成一一年開館）」、都市住民との交流を図る拠点施設「アグリ工房まあぶ（平成九年開館）」等の施設があり、このライスランドふかがわ構想のそれぞれの役割を担っている。

市では、平成二二年に地産地消の取り組みを市民と一体となつて推進するため、市民公募により毎年一月一日を「深川産米記念日」に設定し、その記念日の名称を「深川ノマイ・米・デー」としている。これは、米どころ深川において、一人一人がもつとお米を食べることに

より、自分の（マイ）米という認識を高めるとともに、地元の基本産業を応援しようとする思いが込められている。深川市では、これを日本記念日協会に登録しており、全国的にPRを展開しようとするものである。昨年の「秋の味覚市&こめツち新米フェスタ」と銘をうった記念イベントでは、深川産米のイメージキャラクターである「こめツち」と子供とのジャンケン大会や深川産の新米ふっくりんこを使ったオニギリのコンテストやPR活動を行った。

そのほか、JAきたそらちでは、「こめツち」の米袋を使って市内のエコープ各店・ホクレンショップイチャン店・道の駅「ライスランドふかがわ」で販売しており、地産地消の推進をしている。

また、グリーン・ツーリズム

の受け入れもさかんに行われているが、昨年は二九校、約一、三〇〇名の中学・高校生が札幌や関西から深川のマチに来て農業体験をしている。農家民泊の希望者が多いが、道立青年の家や「アグリ工房まあぶ」でも学生の受け入れをしている。

こうした機会やイベントを利用して農業への理解や深川産米のPRを行っており、深川産米のイメージキャラクターの「こめツち」がついた携帯電話用のストラップなどのグッズが活用されている。

### おわりに

農業の担い手の確保については、ここ深川市でも重要な課題になっているが、新規就農の取り組みについては、山下貴史市

長の発案により(株)深川振興公社内にアグリポート事業部を新設している。これは就農希望者への研修から就農までの間の「中間的雇用組織」としての役割を担うということと、農業への求職と求人という双方の労働力のマッチングを行うものであり、

失業対策事業を活用し、市内の農業に意欲のある人材を振興公社の社員として雇い、労働力不足が深刻な生産者を手助けするものである。三カ年事業で平成二二年は事業二年であるが、市内から既に五人の希望者を受け入れて支援を行っているところである。

長期間にわたって米価は低下したままであり、規模拡大や生産コストを低減する生産努力を行っても、稲作経営の厳しさは

続いている。深川市においては

稲作による産地形成、就中、稲作の特化と規模拡大を進めてきていることから、その厳しさはなお一層のことと思われる。

これまでの深川市ならびに生産者・農協の米にたいする取り組みと道内産地のトップランナーとして果たしてきた役割について深甚な敬意を表したい。現在、ライスランドふかがわ構想の下でたゆまぬ努力が行われているところであるが、わが国の人口減少の問題や、米消費の減少には歯止めがかかってはいない状況にある。

それゆえに、米による産地形成は今まで以上に英知の結集と努力や工夫が求められるであろう。エールを送り強い稲に育つことを願いたい。

(社)北海道地域農業研究所

研究部次長 遠藤 卓也